轟木小

主体的に学び合う力の育成

～複式・少人数における問題解決の力を育成する授業実践を通して～

（３年計画の１年次）

校長　　松橋　淳子

１　研究主題について

本校では、教育目標である「いきいき学びあう子」「なかよくふれあう子」「ほん気できたえあう子」の具現化のために、平成30年度から「主体的に課題を解決する力の育成」を研究主題とし、児童一人一人が学ぶ意欲をもち、主体的に課題を解決するための見通しのもたせ方はどのようにすればよいか、算数科において研究を進めてきた。その結果、前時の振り返りや既習事項の掲示をもとに学習問題の把握をさせ、解決方法の見通しをより明確にもたせることができた。また、解決方法を全体で確認してから自力解決させたり、共通の図を使って話し合わせたりすることは互いの考えが比較しやすくなり、共通点や相違点を共有しながら話し合うことに有効だった。しかし、自力解決の内容に個人差があり、相手に分かるように伝える技能を身につけさせることや、個々の児童の考えをつなげる教師の働きかけの仕方が課題としてあげられた。また、自ら課題意識をもち、解決していこうとする意欲や、進んで表現しようとする主体的な態度はまだ十分とはいえず，互いの考えからそれぞれの考えをさらに深めていく少人数ならではの力を高めていく必要性のあることも明らかとなった。

そこで、これまでの研究成果を生かしながら、個々の考えを深めさせるために、一人一人が自力解決する確かな力を育てたい。そのためには、基礎的・基本的な知識・技能を身につけさせるとともに、習得した力を活用しながら自力解決にあたろうとする意欲や意識を育てていき、さらに、問題解決したことを相手に分かりやすく伝える力を育てていく必要があると考える。これらの取組を、見通しのもたせ方やＩＣＴを活用した教材や活動の仕方の工夫の研究を進めていくことで、「主体的に学び合う力の育成」を目指していきたいと考えた。

２　研究のねらい

一人一人が自分の考えをもち、進んで自力解決するための効果的な指導の在り方を、授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

一人一人の自力解決につながる見通しや考えをもたせる工夫をすることで，主体的に学び合う力を育てることができる。

４　研究内容

⑴　一人一人が自分の考えをもち，主体的に取り組むための工夫

ア　「やってみたい」「できそうだ」と思わせるための課題提示の工夫

イ　課題解決につながるＩＣＴの活用の工夫

５　研究の経過

⑴　研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年　・　授業者　・　題材名
８	１８	第１回　指導案検討会（６年）
６	２	第１回授業研究　（６年）　授業者　教諭　中川　健郎 ６年「走り高跳び」
９	１４	八戸市教育委員会教育指導課・総合教育センター訪問
６	３０	第２回授業研究　（２・３年）授業者　教諭　高島　庸 ２年「図を使って考えよう（１）」　３年「ぼうグラフを使って」
９	１５	第３回授業研究　（１年）　授業者　教諭　山田　訓子 １年「おおきさくらべ（１）」
１０	２０	第４回授業研究　（４・５年）授業者　教諭　木村　頼子 ４年「面積の単位」　５年「平行四辺形の面積」

⑵　一般研修

月	日	内容　・　講師
４	１７	１人１台端末の研修　講師　教諭　中川　健郎
４	２８	絵を描く会のための研修「描画指導（特に初めの意欲のもたせ方）や対応の仕方」 講師　宇部　好子先生
７	１４	「１人１台端末の活用について」 講師　八戸市総合教育センター　大下　洋一　主任指導主事
８	１９	「学校における防災・減災対策～児童生徒の命を守るための環境整備～」 講師　八戸工業大学　土木建築工学科　教授　加藤　雅也先生
９	８	絵を描く会審査会の研修「自分の気に入った一点を選ぶ」　宇部　好子先生　指導
１１	２４	特別に支援を要する子の指導方法について 「つなぐ支援～今、私たちにできること～」 講師　学校心理士・特別支援教育士　青森県立八戸盲学校　教諭　三浦　亜紀先生
２	９	県学習状況調査結果の考察

６　研究の成果

⑴　比較、類推、既習事項の確認、疑問・違いのある課題や気づきを予想させる課題などの提示の工夫による課題解決の方法と活動を指導過程に位置づけることが主体的な問題解決の見通しにつながり、自力解決への意欲につながった。

⑵　児童が自分の活動を振り返ったり、全体で話し合う際に本時の視点やポイントを共有したりする場面では、児童の発達段階にそった指導の工夫ができた。

７　研究の課題

⑴　個人差が大きいので、個々の児童の実態に合わせた問題解決の見通しのもたせ方や自力解決の意欲を持続させる工夫をする必要がある。

⑵　児童の思考にそった、より主体的で効果的なＩＣＴの活用方法を研修していきたい。

（記入者　高島　庸）